資料 36.1987 年 5 月『岩稜』p105,106・p359-361〔文献 40〕〕

昭和35年　明神五峰赤壁中央ルート初登攀

冬山合宿（北穂高岳）

昭和34年12月25日より 1 月 5 日まで高井ほか 4 名が参加し、滝谷第二尾根、第三尾根を登る。

p57 石原（国）は 3 月より 7 月まで東海岳連ジュガール・ヒマール遠征隊に参加し、5 月 7 日マディア・ピークに登頂する。

6 月から 7 月にかけて石大神岩場にて毛塚らは精力的に新ルート開拓の登攀活動を行う。

沢田（栄）は相変わらず四季を通じて立山周辺を広く歩く。

夏山合宿（霞沢岳）

石原（国）がジュガール・ヒマール遠征から帰ったばかりで、毛塚を中心に会の活動が行われる。社会人であるので思うように休暇がとれないため、できるだけ多くの会員が参加できるようにとの配慮のもと、中の瀬キャンプ場に幕営し、霞沢岳の岩場を登ることになる。第一ルンゼ、第二ルンゼ、第三ルンゼ、を登る。

秋山（明神岳五峰赤壁）

石原（国）がジュガール・ヒマールより帰り一段落したので、予てねらっていた明神岳五峰赤壁に登ることを決める。

10月 8 日より10日まで石原（国）ほか 3 名が明神岳五峰赤壁に取り付き、中央ルートの初登攀に成功する。

このあと、冬山も明神岳五峰赤壁を試みることとし、11月11日より13日にかけ、森ほか 4 名にて明神養魚所まで荷上げを行う。

記　録

穂高合宿

34年12月25日～35年１月５日

高井、毛塚、山田、小松、小泉（北穂小屋）

滝谷第二尾根

高井、山田

滝谷第三尾根

毛塚、小泉

ジュガール・ヒマール

３月～７月

石原（国）ほか

＊全日本ヒマラヤ登山隊

マディアピーク初登頂

５月７日

石原（国）

剣岳

３月20日～３月27日

伊藤（経）、森、沢田（栄）、長谷川

木曾駒ヶ岳

５月６日～５月７日

高井、佐野

木曾駒ヶ岳

５月20日～５月21日

毛塚、笠井

薬師岳

６月

沢田（栄）

小岐須峡谷石大神

マディア・ピーク登頂（偵察）

石　原　国　利

5月7日：5時起床、昨夜吹きまくった風もおさまり、静かな朝を迎えた。テントの内張りに張りつめた霜が、身体を動かすたびにパラパラと寝袋の上に降りかかる。先刻より再三シェルパを起こすが、なかなか起き上がらない。思えば、先月29日に第2キャンプを出て以来、休息なしのアルバイトであった。いままでの疲れが今朝になって集約された感じである。

朝食はアルファー米に、乾燥野菜を入れたチキン・スープ。高度の影響顕著で、全員食欲なく早々に食事を終わる。

午前7時、登はん用具を持って第5キャンプを出発。前方、中央峰（マディア・ピーク）にはすでに朝陽が当たっている。しばらく国境稜線をネパール寄りにたどって、7時30分、陽の当たる中央峰の基部に到着。ここでアンザイレンし、頂上より落ちる雪稜（東稜）に取り付く。オーダーは加藤、パサン・プタールII、チョターレ、石原の順。登路はすぐ急になり、トップは足場を刻み始める。薄い雪の下の厚い氷。刻まれた氷片が足元を流れ、谷底へ落ちてゆく。

レディス・ピーク、ギャルツエン・ピーク、中央山稜の峰々、すべてがわれわれの眼下に望まれるようになった。一つ一つのピークが雲海に浮かぶ大きな島だ。雲海の彼方、遙か東方にひろがる山なみはエヴェレスト、マカルー、ガウリサンカールを中心とする峻峰の群れであった。

やがて雪稜の背に出たとき、北方に新なる展望がひらけた。チベットの山々だ。しかし、そこに見たのは茶褐色の塊石と砂礫の、荒漠たる拡がりであった。青い氷、白い雪と雲、そして緑に包まれた山麓と、明るい色彩に満ちたネパール側に較べて何という寂しさであろう。その中、われわれと谷一つをへだてて、ひときわ堂々たる山足をもつ高峰が眼前に望まる。未登唯一のジャイアンツ・ゴザインタン（8,013m）にちがいなかった。堆石に覆われた広大な氷河が大きく発達して、その山麓をとり囲んでいる。氷河の延びた先には、茶褐色に塗りつぶされた乾いた空気のチベット高原が、限りなく続いている。高原に点在する沈んだ色の湖の存在が、かえってあたりの景色を寂しくしている。

トップは相い変わらず足場切りに全力をそそいでいる。疲れた身体で、この高度で、ピッケルを振り続けることがいかに苦労を要することか……激しい息づかいがわれわ

れの胸をうつ。いま、私はこの苦しい登はんの中で、自由を求めてチベットに苦難の旅を続けたハーラーに想いをいたしていた。

11時すぎ、山麓に沈んでいた雲海が上昇し、明るかった太陽の光が薄らぎ始めた。やがて、雲が眼の前を走り、小雪が頬を打つ。全員黙々として一歩一歩が鉛のように重い身体を持ち上げる。難場をすぎて、トップがパサンプタールIIと交替する。

午後1時ちょうど、最後の斜面を登り切り、ついに頂上に立つ。厚い雪に覆われた平らな峰。全員無言のまま頂上に佇んだ。何も言うことはない。ただ一仕事したという気持ちがあるだけであった。

あたりはガスに閉ざされて、視界はほとんどきかない。時折り、流れるガスの切れ目に主峰稜線の大きな雪庇が姿を現わす。先を確かめるべくもうすこし進んでみることにする。なだらかな斜面を下り、ドルジェラクバ氷河上端の台地をすぎると、やがて雪壁にぶつかった。チベット側をのぞいて見るが、圧倒的に切れ落ちた側壁で手が出ない。ネパール側に引き返したとき、尾根上にかっこうのスノー・ホールを有する窪地を発見した。絶好のテント地だ。

午後2時、ここにどっかと座り込み昼食をとる。ヒットビー、チョコレート、ヨーカン、テルモスの緑茶その他。

2時30分、帰路につかんと稜線に出るも、この頃より天候悪化、風雪が強まった。全員疲労甚だしく、また下降路の悪さも考えて、加藤サーブと相談の末、スノー・ホールでビバークすることに決める。

スノー・ホールは中が広くなっており、優に8畳敷き位の広さが合った。ここは風もなく、烈風の吹きすさぶ稜線に較べれば別天地だ。正に天の恵みと言えよう。早々にツェルトに入り睡眠体制をとった。靴を脱ぎ、予備の靴下を重ね、身体をすり寄せていると、さして寒さを感じない。ひと眠りした夜10時すぎ、ローソクに火をつけミカンの缶詰を丹念に暖めたべる。なんというおいしさ。4人にたった一つの缶詰であるが、われわれの人生の内、あとこんなに心のふれあう食事を経験することが何度あるだろうか。

夜中は、さすがの寒気とツェルトの狭ま苦しさに、しばしば目を覚まされたが、翌朝までうとうととねむり続けた。

5月8日：6時半、チョターレの「サーブ！サーブ！モーニング・サー！」と言う声と共にゆり起こされた。スノー・ホールの外はすでに明るくなっている。陽のさすのを待ち、7時すぎスノー・ホールの外に出る。外は風も止み見事に晴れ上がって、ジュガール一帯が朝日に照らされていた。昨日はガスに閉ざされていた主峰稜線も、

今朝は一ぱいの陽光に輝いている。

われわれに判明したことの大体は次の通りである。

① マディア・ピークの頂上と、ビッグ・ホワイト・ピークの頂上とは、1本の釣尾根によってつながっている。

② マディア・ピークと、ビッグ・ホワイト・ピークとの高度差は約 200m程度である。

③ 釣尾根は、一たん70～80m下がり、あと、幾つかの小起伏を有しながら、ネパール側とチベット側に交互に複雑な雪庇を張り出しながらビッグ・ホワイト・ピークの頂上に続いている。この雪庇の変わり目をいかに通過するかが、主峰攻撃の重要なポイントになるであろう。

偵察を終えたわれわれが、釣尾根を最低鞍部まで戻ったとき、シェルパの2名が、これから先、昨日の登路の下降を嫌い、ドルジェラクパ氷河を下りたいと言い出した。最初はこばんだがシェルパ2人だけでもそうさせて欲しいと言う。それではということで、全員でドルジェラクパ氷河を下ることにした。スピード・アップをはかるためザイル・パーティを二つに分け、彼等の希望をいれサーブはサーブ、シェルパはシェルパ同志ということにすると、帰心矢の如くシェルパの2人はさっさと先に下り始めた。中央稜の上部は広い雪の斜面の下り。下るにしたがった随所にクレバスが現われ、これを右に左に避け、思いのほか時間を要し、苦労する。

午後3時、長い中央稜もやっと終わりをつげてハイ・パスに下り立ち、あとCⅣを経て午後5時、CⅢに戻る。 〔登頂記おわり〕

全日本ヒマラヤ登山隊（1960）報告書